

日欧考古学交流の一里塚—置田雅昭先生を偲ぶ—

天理大学文学部教授
桑原 久男 Hisao Kuwabara

10月9日、考古学・民俗学専攻の元教授・置田雅昭先生の訃報がまったく突然に伝わった。ご家族によると、事故のために1カ月ほど入院をしていた奈良市内の病院で息を引き取ったとのことで、享年は74歳。通夜・葬儀はご家族で行うとのことだった。しかし、先生の訃報はすぐさま各方面に伝わり、10月11日の通夜には、大勢の卒業生が遠近を問わず駆けつけて、先生と最後のお別れをした。エネルギーに溢れ、無茶なことも多かった先生だったが、情が濃く、その無茶ぶりも含めて学生たちに慕われていた。西日本の各地で遺跡の探査に取り組み、寝食をともにしながら、分け隔て無く、開けっぴろげに学生たちと付き合った。

置田先生は、1944年2月24日、大阪府南河内郡に生まれ、天理教の教会の長男として育てられた。高校時代から考古学クラブに参加し、関西大学や大阪大学の発掘を手伝った。教会の後継者であり、また、著名な考古学者・梅原末治先生が天理大学に赴任されていたことを知り、1963年、天理大学の宗教学科に入学する。天理大学では、丸川仁夫先生に卒論の指導を受け、西谷眞治先生・金関恕先生や参考館の先生方に考古学の教えを受けた。大学在学中は発掘三昧の日々が続く、4年生からは参考館の考古美術室でアルバイトとして勤務するようになり、その延長で、大学卒業後は天理参考館に就職。1992年、天理大学に歴史文化学科が開設されるのに伴い、1991年、アメリカ、インディアナ大学に交換教授として1年間滞在した後、天理大学教授に着任し、2008年に定年のため退任した。

天理参考館、天理大学に在職中の置田先生は、考古学の道を邁進し、とくに、土器や埴輪、武器など、古墳時代の研究で全国に名を馳せた。日本国内では布留遺跡の調査を牽引し、海外では、イスラエルのテル・ゼロール、エン・ゲヴ、テル・レヘシュといった遺跡調査に携わった。地中レーダ探査など、遺跡探査を実験的に考古学に活用した先駆者としても知られている。天皇陵古墳の公開を求める学会の取り組みにも主導的な役割を果たし、オオヤマト古墳群の保存問題にも熱心に取り組まれた。このように、考古学一筋だった先生は、しかし、大学を退任後は、遺跡の発掘報告書などの蔵書をイギリスの研究機関に寄贈するとともに、考古学はやめたと宣言し、きっぱりと別の道を歩まれた。在職中は好きなことを存分にさせてもらったからと、奈良市内の自宅を布教所に改装し、天理に足を運んでも大学にはお見えにならず、最後まで信念をもって、先生らしい生涯を貫かれた。

置田先生の通夜には、当日、参列ができなかった関係者からの弔電のほか、海外から届いた電子メールが翻訳されて読み上げられた。「何ということでしょう。とても悲しい知らせです。どうして私の先生はこんなに早く旅だってしまうのでしょうか」とのメッセージを寄せたのは、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院(SOAS)教授のジナ・バーンズ先生だ。東アジア、とくに日本の考古学を専門とするバーンズ先生は、『原史時代の和』(英文)などの著作があり、1978年、天理市布留遺跡の発掘調査に参加し、出土遺物の統計処理を指導した。置田先生とはその頃からの長い付き合いで、奈良盆地で発掘したいとの

希望をもって
いたバーンズ
先生は、置田
先生を研究の
パートナーと
して、1984年、
天理市内の朝
和地区でボー
リング調査を
実施した。そ



三輪遺跡での置田雅昭先生(左端)とジナ・バーンズ先生(左から2番目)

三輪遺跡での置田雅昭先生(左端)とジナ・バーンズ先生(左から2番目)の際、バーンズ先生が当時所属していたケンブリッジ大学の学生たちも来日したのだが、今回、その一人から、置田先生のご家族に向けた長文のメッセージが日本語と英語で届けられた。「置田先生は、私を含め多くの外国の考古学者の友人であり、日本での考古学でのキャリアを積む上で、先生より非常に大きな薫陶を受けました。思い起こせば、私の初来日は、1984年3月で、まだケンブリッジ大学3回生の頃、ジナ・バーンズ教授により紹介されてのものでした。まだ未熟な学生にとって、これはまたとない機会になりました。ケンブリッジ大学と天理大学とは協同で「Ten-Kenプロジェクト」を運営しており、バーンズ先生のパートナーを務められたのが置田先生でした。そのおかげで、私は置田先生のご紹介をいただくことができ、天理周辺の奈良盆地におけるフィールドワークなど、日本の考古学をじかに探求する幸運に恵まれたのです。私の日本への興味、なかでも考古学への興味は、この経験を出発点として今に至るまで何十年と続くことになったのです。」「私もセインズベリー日本藝術研究所のリサ・セインズベリー図書館では、置田先生の考古学文献ならびに三輪プロジェクトのアーカイブスを所蔵させていただいております。まことに光栄に思います。」そう、置田先生が大学の退任に際して図書を寄贈したのは、当時は学生だったサイモン・ケーナー博士が所長を務める研究所だったのだ。

バーンズ先生と置田先生による三輪プロジェクト(Miwa Project)では、1986年、桜井市の三輪遺跡を発掘調査地に選定し、地権者から調査の承諾を得たり、研究助成を申請するなどの準備を開始した。1988年には電気探査、磁気探査、ボーリング調査を実施し、1989年8月21日～9月8日までの3週間、発掘調査が行われた。当時、大学院生だった私もこの発掘調査には調査補助員として参加し、ケーナー博士や今はドイツにいるマーク・ハドソン博士らとの知遇を得た。「置田先生は、これまでお会いした日本の考古学者の中でも、おそらくもっとも海外との交流に対してオープンな方だったと感じています」と、ハドソン博士がメッセージで記したように、置田先生は、外国の研究者や学生に対しても遠慮がなく開けっぴろげだった。日欧の考古学の交流はその後大きく幅が広がり、今では各種のプロジェクトが活発に行われている。その一里塚になった三輪プロジェクトは、戦後制定された文化財保護法に基づいて、外国の調査隊が主体になって発掘調査を行った希有の事例だったのだ。置田先生のご逝去にあらためて哀悼の意を表したい。